



夏休み親子木工教室 プロと取り組む工作の課題



小中学校の生徒を対象とした「夏休み親子木工教室」は、8月21日（日）小川木協で開催された。昨年に引き続き今年で2回目となるこの教室。東秩父、高山、小川から120名の親子連れが集まった。小学校の夏休みの宿題を仕上げるチャンスだという。

親子連れはアイデアを駆使してイスや写真立て、クワガタの昆虫の模型などを工作。材料や工具は、会場すでに準備されているので、好きな木材を選んで加工する。電ノコやドリルなど工作機械を使った加工は、材木屋や建具屋のプロに手伝ってもらったり、手ほどきを受けながら思い描いている作品に仕上げていく。中には3つ4つも作って嬉しそうに帰る親子連れも見られた。宿題として学校提出された作品は、日本木材青壮年団体連合会主催の「第36回全国児童・生徒木工工作コンクール」の応募に向けて、埼玉木青連で優秀作品が選ばれる。10月16日（日）には、木材建具まつりにて、プロの建具作品を展示するほかに、木工工作コンクールを実施。各学校から優れた作品を展示するほか、今回参加した家族連れの作品も写真展示する。

建具の産地である埼玉県小川町。酒造や和紙と並び、ふすまやフラッシュシェードなどの建具・木工製品の生産が、



同町の主要産業の一つとして位置づけられている。

教室を主催するのは小川木材建具工業協同組合の青葉会。もともと地元材木屋・建具屋で構成される組合木材部の会として結成されたが、高齢化や後継者不足が進む中、業者間の取引が中心の業界においても、未来を担う子供たちとの交流の機会を増やすことで、地場産材と建具の振興を図ることを目的として始めた。高橋喜重郎代表によると、子供が使いやすい材料を今日のために準備してきたという。

「テーブルやイスはできるだけ丈夫になるように釘打ちを教えています。子供たちからは、とても自由な発想が出てくるので驚きます。一般の方は、ホコリのついた木材は使ってくれないのできれいにして工場から運んで来ます。サワラだと30cmほどの幅がないと加工に使いにくいので事前に心がけてとっておきました」

昨年は青葉会10人の会員で主催したが予想以上の参加者が集まった。今年からは親組織である小川木材建具工業協同組合（小川木協）の会員や同青年部も参加。午前9時から午後3時まで開催したが、昼を過ぎても話を聞いて駆けつける親子連れの姿も見られるなど一日中賑わった。

（取材 村上）